

優れた文学論

おぎの あんな
萩野 安奈

(慶應義塾大学大学院文学研究科教授)

今回は文学に関わる課題が二つあり、文学部の教員として、読んで足元をすくわれるのか、それとも励まされるのか、緊張しながら読み進めた。

むしろ文学無用論があっても面白い、という発想自体が文系なのかもしれないが、実際にはバランスのとれた作品がほとんどで、粒ぞろいの豊年だった。

受賞作はタイトルに痺れた。「文学は社会の役に立つか」という設問自体の是非を「問う」。それだけで文学好きと察せられるし、批評精神の持ち主と分かる。内容はタイトルを裏切らなかった。文学に有用性を求める社会は、「即戦力」以外の、いわば無用な存在を、許容しないことが冒頭で確認される。結論としては、「置き換え可能な歯車」に自足しな

い限り、人間は自己の本質を問いつける文学的営為において「尊厳」を保つことが出来る。

冒頭と結論が見事に繋がって、全体がひとつの輪を描いている。輪の中身は多彩で、人間の思考と言語の関連性がまず確認される。次に、言葉による世界解釈の一方に自然哲学が、他方に神話が設定される。それが合理性に基づく科学と、不条理に対峙する文学に進化する。

文学の源泉に神話を置いたことで、論が膨らみ、また深まった。援用されるテクストも『ギルガメッシュ叙事詩』から吉本隆明まで多岐にわたっている。世界と自分の関係性を問うために文学と関わってきた稲垣さんの「読書歴は長いと見た。次席の鷺山さんは素直に楽しんで読めた。映画を通して家族を考えるという手法に独自性がある。『東京物語』、寅さん、そして『万引き家族』というセレクトションがすでに雄弁で、人間同士の関係性が希薄な現代に、いかにして「互いに寄り添う」かが問われている。映画の次に来るのは漫画で、『大家さんと僕』における疑似家族の在り方が、ひとつの可能性として提示されている。近寄り過ぎず、

離れ過ぎない絶妙な距離感。過去を未来につなげるための場が、そこにはある。最後に登場するのは鷺山さんの本物の家族で、事あるごとに「家族会議」を開く仲の良さが微笑ましい。

同じ家族を論じて、佐藤さんは延命治療という重い主題に立ち向かった。祖父の死を契機とし、延命治療の実際を日本のみならず欧米の例を含めて丁寧に論じている。佐藤さんは看護職を希望。是非このような人に見てもらいたいものだ。

早坂さんは「自分のために懸命に努力するよう促されてきた」高校生活の中で、『学問のすゝめ』と出会い、社会への貢献という新たな視点を獲得する。福澤論吉が早坂さんにとって「新鮮」だったことが、私には新鮮だった。

宮下さんは理系偏重の現状を分析した上で、文系と理系の上位概念として「市民」を設定したことに独自性がある。今日、良き市民であるためには、専門知識のみでは事足りない。科学的知識の欠落は似非科学の跋扈を許す。歴史の無知は現状への正しい対応を妨げる。「総合的な視野を持った『ジュネラリスト』」でありたい、と私も思う。